

大学生の社会人ステレオタイプと就職意識^(1, 2)

上 瀬 由美子*

キーワード：社会人ステレオタイプ、大学生、自己効力感、就職意識

問 題

本研究では大学生の抱く社会人ステレオタイプの構造について明らかにするとともに、就職意識との関連を検討する。

大学生の抱く社会人ステレオタイプ

大学卒業者の職業未決定の問題が社会問題として注目されて久しい。この現象に関して、わが国ではこれまで、自我の未確立（下山，1986）、自己効力感（浦上，1993；1995）、職業興味（安達，2003）などが背景要因として注目されてきた。その中で上瀬（2007）は、社会人に対する否定的なステレオタイプが大学生に広く普及しており、これが就職活動を妨げる一因である可能性を指摘している。ここでは、描画法を用いて、大学生が自発的に思い浮かべた社会人やサラリーマンの典型的例の抽出が試みられている。分析の結果、「スーツとネクタイで忙しく残業をしている男が、疲れて愚痴を言っている」、「汗をかいて頭を下げながら仕事をしている」、「車内で疲れきった様子で集団に埋没している」、「女性を含めて笑顔で挨拶をしている」の4つの姿が典型例として提出された。また、絵に加えられた説明文の内容分析から、大学生が社会人に抱く感情や評価には、同情・哀れみ・軽蔑など否定的なものが多く、全体の6割を占めていることが指摘された。これに対して、尊

敬や賞賛を示す肯定的な感情は、回答の3割程度であった。

Fiske, Cuddy, Glick, & Xu (2002) によれば、社会集団に対する認知は、能力と暖かきの2次元で構成され、この2次元を組み合わせた4象限のどこに集団を位置づけるかによって、付与される感情が異なると指摘されている。例えば、能力が高く暖かいと認知した集団には誇りや賞賛を感じやすい。このタイプの認知や感情は準拠集団に対して生起されるものでもある。一方、能力は高いが冷たい集団として捉えられれば敵意や嫉妬や賞賛を、能力が低く暖かいと捉えられれば哀れみや同情を、能力が低く冷たいと捉えられれば軽蔑を感じやすく、これらの認知と感情は外集団に対して生起しやすい。上瀬（2007）は、この知見を、大学生が社会人に対して同情・哀れみ・軽蔑などの感情を抱きやすいという結果の解釈に用い、大学生が社会人を能力の低い外集団として位置づける傾向にあると論考している。ただし、上瀬（2007）の知見は、描画法と自由記述結果から得られた示唆であり、この社会人ステレオタイプが、社会人全体に対する認知構造とどの程度一致しているのかは明らかではない。特に、描画法の場合は、想起されやすい典型例のみが分析の対象となる。また、典型例として想起される社会人ステレオタイプが、社会人全体に対する認知や感情とどのように結びついているのかについても、明らかではない。

2008年11月28日受付

* 江戸川大学 人間心理学科教授 社会心理学

社会人ステレオタイプ形成の背景

外集団に対するステレオタイプの形成は、接触の少なさに基づく情報不足が一因となっている (Allport, 1954)。また、接触がある場合でも、内集団の価値やそれに基づく社会的アイデンティティ高揚のために、外集団に対して否定的な評価がなされやすいことも知られている (Tajfel & Turner, 1979)。

大学生の抱く社会人ステレオタイプの形成に関しても、同様のメカニズムが推測される。核家族化が進んだ家庭に育ち、地域とのつながりも少ない現代の大学生の場合、家族以外の社会人と知り合う機会は限定され、個人化した接触 (Brewer & Miller, 1984) は発生しにくいと考えられる。上瀬 (2007) で提出された社会人の4典型例は、個人化された親しい関係から形成されたイメージというよりも、街で見かけたり、テレビドラマ等で風刺化して描かれた様子をもとに形成されているものと推測される。また、表面的で一時的な接触からは、メディア等で提示される既存のステレオタイプが強化される可能性も強い。加えて、就労前の状態におかれた大学生という社会的アイデンティティを高く価値付けるために、彼らが就労をしている社会人を卑下する過程が生じる可能性もある。

その一方、ステレオタイプ保持の程度には個人差があるものと推測される。その差をもたらすもののひとつが、彼らの社会経験である。インターンシップや実習、アルバイト、あるいはボランティアなどの実際の社会経験は、実際に社会人と行う共同作業 (Sherif, Harvey, White, Hood, & Sherif, 1961) とも言い換えられ、個人化した接触を生みやすく、ステレオタイプの低減にもつながると推測される。

加えて、大学生自身の属性によっても、社会人ステレオタイプの強さに差異が生じるものと推測される。例えば、社会人ステレオタイプは男性社会人の姿として想起されやすい。このため女子学生の方が男子学生より、対象を外集団として見なし

やすく、結果として否定的なステレオタイプや感情が付与されやすいと予測される。また、就職活動が身近になる上級生ほど、将来の自己像を現実の社会人集団と結びつけて考えるようになる。このため、上級生の方が下級生よりも、社会人に対する否定的なステレオタイプや否定的な感情が低くなりやすいと予測される。

社会人ステレオタイプと就職活動

前述のように、上瀬 (2007) では、社会人ステレオタイプが大学生の就職不活発に結びつく可能性を示唆しているが、論考にとどまっている。

ところで、Lent, Brown, & Hackett (1994) による社会・認知的進路理論 (SCCT) では、自己効力感や結果期待などの個人の認知が進路発達のプロセスにおいて重要な役割を担うと指摘している。自己効力感とは課題に必要な行動を成功させる能力の自己評価、結果期待とは課題を遂行した結果に何が得られるかの予測である。このうち前者は、特に目標設定や具体的な活動において重要なものとして指摘されている。わが国の研究でも、自己効力感と結果期待が就職動機や職業興味と肯定的につながる事が示されている (安達, 2001; 2003 など)。ただし、これらの研究では、SCCTの指摘とは異なり、結果期待の影響力も、自己効力感と同様に大きいことが指摘されている。これについて安達 (2003) は、わが国では各職業についての理解が進んでいないため、職業に対する興味・関心を喚起されるプロセスとして、活動に携わることで何が得られるのかという結果期待の影響が大きいものと推察している。

本研究で注目する社会的ステレオタイプは、上記研究文脈の中では結果期待にかかわるものと位置づけられる。安達 (2003) をはじめとして、これまで進路発達プロセスにおける結果期待の測定は、特定の領域で自分がどの程度望ましい結果を得られるかを問う形で行なわれていた。一方、本研究が注目する社会人ステレオタイプは、他者の姿から、将来の自分への結果期待が間接的に示されたものと考えられる。安達 (2003) が指摘するように大学生において各職業に対する理解が進ん

でない現状があるならば、一般に普及する社会人の就労イメージが、自分自身の就業における結果期待として機能する可能性がある。従って、大学生の中で否定的にステレオタイプ化された社会人像が存在するならば、その内容や付随する感情が就職活動への取り組み方そのものに影響を与えるものと仮説される。

本研究の目的

以上の問題をふまえ、本研究では以下の4点を目的とし、大学生を対象とした質問紙調査を行った。

第1の目的は、上瀬(2007)の描画研究で得られた社会人ステレオタイプが大学生においてどの程度共有されているのかを明らかにすることである。上瀬(2007)で提出された社会人ステレオタイプは、一部の社会人像を極端化したものと考えられ、社会人全体の評価とは必ずしも一致していない可能性がある。このため質問紙では、上瀬(2007)で抽出された社会人ステレオタイプの特徴を調査項目として用い、それぞれが回答者のイメージとどの程度一致するかを尋ねた。

第2の目的は、社会人ステレオタイプが、社会人全体に対する認知や感情とどのような関連をもつかを検討することである。前述のように、上瀬(2007)では、社会人全体に対する認知・感情について十分に検討されていない。このため、本調査では、外集団に対する認知・感情を測定する項目として Fiske, *et al.* (2002) の項目を適用し、社会人に対する認知と感情を尋ねた。また、本研究では強調化された典型例を社会人ステレオタイプと位置づけ、社会人全体に対する認知とは別に測定した。なお質問紙では、回答者がステレオタイプ化されたイメージに誘導されないよう、まず社会人全体に対する認知と感情を尋ね、その後で社会人ステレオタイプの項目について尋ねた。

第3の目的は、大学外の社会経験量、学年、性別によって、社会人に対する態度に違いがみられるかを検討することである。前述のように、大学外での社会経験は社会人ステレオタイプを低減させる可能性がある。また、社会人を外集団として

位置づける傾向は、学年や性別によって異なると考えられる。本調査では、社会経験量として、各種インターンシップ、各種実習、アルバイト、ボランティアの経験を尋ね、社会人に対する態度との関連を検討した。また、調査対象者を大学1年～3年までの男女とし、学年および性別による態度の違いを検討した。

第4の目的は、社会人に対する態度と、就職意識との関連を検討することである。社会人に対する否定的ステレオタイプや否定的感情は、就職活動を抑制することにつながると推測される。本研究では、就職意識にかかわるものの中から、次の2つの指標を用いた。ひとつは就職効力感(浦上, 1995)、もうひとつは現在希望する職業の数である。就職活動について情報収集をしたり、自分の可能性を検討している学生の場合、両尺度得点は高くなると推測される。このため、両尺度得点の高さを、就職活動への積極性の指標として用い、社会人に対する態度との関連を検討した。

方 法

質問項目

1. 社会人に対する態度

- (1) 社会人ステレオタイプ：上瀬(2007)をもとに、「スーツ姿」「忙しい」「上司に逆らえない」など社会人ステレオタイプに関わる49項目を作成した。これらについて回答者自身の社会人イメージにどの程度あてはまるかを尋ねた。回答は「あてはまる」「どちらともいえない」「あてはまらない」の3件法で求めた。
- (2) 社会人に対する認知：社会集団に対する認知次元を測定した Fiske, *et al.* (2002) をもとに「知的」「寛大」など14の形容詞を作成し、回答者自身の社会人イメージにどの程度一致しているか「5.一致している」から「1.一致していない」の5件法で尋ねた。
- (3) 社会人に対する感情：社会集団に対する感情を測定した Fiske, *et al.* (2002) を日本語訳し、「尊敬」「怒り」など感情を示す17の

名詞を作成した。これらについて回答者自身が社会人に抱く感情とどの程度一致しているかを尋ね「5.一致している」から「1.一致していない」の5件法で回答を求めた。

2. 就職意識

- (1) 就職効力感：浦上（1995）の進路選択に関する自己効力尺度（30項目）を用い、元論文に従い得点を算出した。値が高いほど、就職活動に積極的に取り組んでいることを示している。
- (2) 希望する将来の職業：将来の職業（進路）として現在考慮している選択肢を全てあげるよう求め、記入した選択肢の数を分析対象とした。

3. 研修やアルバイトの経験

「大学に入学してからこれまでに以下のような経験がありますか。あてはまるものすべてに○をつけてください」との形で、「教育実習」「販売業、サービス業、接客業などのアルバイト」「ボランティア」など8つの選択肢について、あてはまるもの全てに○をつけるよう求めた。

調査対象者および調査方法

調査対象者は、首都圏にある4つの大学の学生400名（男性276名、女性124名；1年生162名、2年生60名、3年生177名、不明1名）である。調査実施は2005年6月、大学の講義時間に集団実施（一部は個別に依頼）した。

結 果

社会人に対する態度

1. 社会人ステレオタイプ

社会人ステレオタイプについて尋ねた49項目のうち「あてはまる」が多かった項目は「スーツ姿（84%）」「ネクタイをしている（75%）」など外見に関するものであった。同時に「忙しい（78%）」、「疲れている（77%）」など嫌な仕事に疲労しているイメージも強かった。

これらの回答を因子分析（主因子解）し、固有値の変化から4因子を抽出しプロマックス回転を行った（Table 1）。結果をみると、第1因子に負荷量の高かった項目は「疲れている」「一日中デスクワーク」などで、社会人に対し疲労した姿に関する因子と考えられ、「疲労像」と命名された。第2因子は「七三分け」「髪が禿げている」「中年」などに負荷量が高く、「外見像」因子と命名された。第3因子は「夢をもっている」「かっこいい」など肯定的な項目に関連が強く、有能に仕事をこなすイメージと考えられた。このため「キャリア像」因子と命名された。第4因子は「適当に仕事」「のんびり仕事」などに負荷量が高く、消極的な社会人イメージと考えられ「マイペース像」因子と命名された。各因子の固有値は、順に9.85, 3.90, 2.81, 1.86であった。また、因子相関行列は、第1因子×第2因子が0.48, 第1因子×第3因子が0.12, 第1因子×第4因子が0.30, 第2因子×第3因子が0.02, 第2因子×第4因子が0.42, 第3因子×第4因子が-0.29であった。

これらの因子について、負荷量が0.40以上の項目の回答を単純加算する形で尺度化を試みた。第1因子に負荷量の高い17項目の合計を疲労像得点（ $\alpha=0.87$ ）、第2因子に負荷量の高い7項目の合計を外見像得点（ $\alpha=0.84$ ）、第3因子に負荷量の高い7項目の合計をキャリア像得点（ $\alpha=0.74$ ）とした。この3尺度得点間の相関はTable 2に示すとおりである。なお、第4因子についても尺度化を試みたが、 $\alpha=0.57$ と信頼性が低かったため、以降の分析では用いていない。

3尺度の得点について性×学年の2要因の分散分析を行ったところ、Table 3に示すようになった。「疲労像」は、性別と学年に有意な主効果がみられ、女性に得点が高く、2年生に得点が高かった。「外見像」は、学年に有意な主効果がみられ、1年生・2年生に得点が高かった。「キャリア像」は、性別の有意な主効果がみられ、女性に得点が高かった。また性×学年の交互作用も有意であり、下位検定の結果、男性のみ3年生の得点が1・2年生より高かった。

Table 1 社会人ステレオタイプ項目の因子分析結果（プロマックス回転後のパターン行列）

N=389

	肯定率(%)	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
		疲労像	外見像	キャリア像	マイペース像
疲れている	77.0	0.621	-0.243	0.028	0.169
ネクタイをしている	74.8	0.602	0.002	0.041	-0.075
接待や付き合いでのみに行く	71.0	0.594	-0.110	-0.008	0.082
一日中デスクワークをしている	45.1	0.576	0.185	-0.102	-0.095
スーツ姿	83.7	0.575	-0.050	0.018	-0.169
忙しい	78.0	0.550	-0.143	0.143	-0.030
営業で外回りをしている	47.4	0.543	0.208	-0.013	-0.123
客に頭を下げている	62.2	0.522	-0.023	-0.056	0.182
満員電車で通勤している	68.9	0.516	0.115	-0.039	-0.065
上司に逆らえない	64.3	0.498	-0.020	-0.069	0.138
平社員	48.6	0.490	0.156	-0.181	-0.013
グチを言っている	46.6	0.448	-0.090	-0.069	0.343
朝早く出勤	65.5	0.439	-0.055	0.142	0.078
仕事後に酒で疲れを癒している	60.9	0.436	-0.002	0.022	0.230
毎日同じことを繰り返している	60.7	0.425	-0.028	-0.008	0.247
携帯電話で仕事の話をしている	50.0	0.417	0.144	0.163	-0.055
上司に怒られている	45.4	0.410	0.101	-0.029	0.298
七・三分け	11.5	-0.111	0.744	-0.009	0.027
髪が禿げている	13.5	-0.127	0.743	-0.034	0.165
めがねをかけている	19.5	-0.033	0.679	0.067	0.124
中年	32.3	0.227	0.637	-0.083	-0.110
汗をかいている	21.0	0.063	0.543	-0.006	0.103
太っている	7.3	-0.097	0.493	0.038	0.075
移動中に新聞を読んでいる	40.8	0.275	0.456	0.074	-0.003
夢をもっている	20.0	-0.309	0.108	0.647	0.144
カッコいい	29.1	0.153	-0.096	0.627	0.129
好きな仕事をしている	15.8	-0.298	0.217	0.574	0.105
スマート	21.6	0.054	-0.040	0.561	0.142
一緒に働いてみたい	36.0	0.015	-0.167	0.528	0.082
仕事が速い	38.1	0.281	0.050	0.438	-0.044
仕事をバリバリこなしている	45.9	0.321	-0.028	0.427	-0.205
適当に仕事をしている	11.0	-0.179	0.195	-0.116	0.562
のんびり仕事をしている	7.3	-0.219	0.114	0.008	0.515
ひとりぐらし	23.3	0.038	-0.095	0.265	0.461

注) いずれかの因子に負荷量が0.40以上の項目のみを掲載した。

2. 社会人に対する認知

「知的」「寛大」など14の形容詞への回答について、「一致している」「やや一致している」を併せた肯定率を算出した（Table 4）。その結果、「自立している」「責任が大きい」が8割と他を引き離して高かった。その他では「競争心がある」「お金を持っている」が5割、「誠実」「有能」「自

信を持っている」「知的」が4割弱で続いていた。これらの回答を因子分析（主因子解）した結果、固有値1.0以上の3因子が抽出され、プロマックス回転を行った。回転後のパターン行列は、Table 4に示すようになった。各因子に負荷量の高い項目から、第1因子を「暖かさ」、第2因子を「有能さ」、第3因子を「社会的地位」名づけ

Table 2 尺度得点間の相関

	疲労像	外見像	キャリア 像	暖かさ	有能さ	社会的 地位	軽蔑	賞賛	同情	羨望	社会経験 得点	希望する 職業数
外見像	r (N)	0.51*** (391)										
キャリア像	r (N)	0.13*** (392)	0.10 (394)									
暖かさ	r (N)	-0.06 (393)	0.04 (393)	0.46*** (394)								
有能さ	r (N)	0.12* (392)	-0.03 (393)	0.51*** (394)	0.39*** (396)							
社会的地位	r (N)	0.26*** (392)	0.21*** (393)	0.35*** (394)	0.24*** (396)	0.38*** (397)						
軽蔑	r (N)	0.07 (388)	0.32*** (388)	-0.07 (389)	0.05 (391)	-0.13* (390)	-0.05 (391)					
賞賛	r (N)	0.00 (392)	-0.06 (393)	0.56*** (394)	0.46*** (395)	0.48*** (395)	0.41*** (395)	-0.04 (391)				
同情	r (N)	0.14** (390)	0.27*** (391)	-0.10* (392)	0.05 (393)	-0.14** (393)	-0.07 (393)	0.52*** (388)	-0.05 (393)			
羨望	r (N)	0.03 (393)	0.13** (394)	0.16** (395)	0.06 (396)	0.13** (396)	0.18*** (397)	0.37*** (392)	0.36*** (396)	0.24*** (394)		
社会経験得点	r (N)	0.08 (394)	-0.02 (395)	0.00 (396)	0.01 (398)	0.03 (398)	0.01 (398)	0.06 (392)	0.02 (397)	0.04 (395)	0.08 (398)	
希望する職業数	r (N)	0.00 (390)	-0.11* (391)	0.08 (392)	0.03 (394)	0.04 (394)	-0.04 (394)	-0.05 (388)	0.04 (393)	0.05 (391)	0.03 (394)	0.18*** (369)
就職効力感	r (N)	-0.12* (374)	-0.10 (376)	0.18*** (377)	0.18*** (378)	0.06 (378)	-0.01 (378)	0.01 (372)	0.16** (377)	-0.08 (376)	0.01 (378)	0.21*** (376)

注) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 3 性・学年別にみた社会人ステレオタイプ尺度得点

性別 学年	疲 勞 像			外 見 像			キ ャ リ ア 像			
	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	
男性	1	41.31	6.68	106	13.12	3.44	107	13.65	3.08	108
	2	43.76	7.54	38	14.05	3.77	39	13.49	3.60	39
	3	42.89	6.10	127	12.21	3.65	126	14.98	2.96	126
女性	1	43.10	6.45	52	13.15	3.82	52	15.02	2.73	52
	2	46.05	3.28	21	13.52	3.41	21	15.48	2.44	21
	3	44.57	4.73	49	11.51	2.98	49	14.71	2.79	49
性別主効果	$F(1,387) = 6.57^{**}$ 男性<女性			$F(1,388) = 0.88$ n.s.			$F(1,389) = 8.22^{**}$ 男性<女性			
学年主効果	$F(2,387) = 4.33^*$ 1<2			$F(2,388) = 7.59^{***}$ 3<1,2			$F(2,389) = 1.08$ n.s.			
交互作用	$F(2,387) = 0.05$ n.s.			$F(2,388) = 0.40$ n.s.			$F(2,389) = 3.98^*$ 男性: 1,2<3			

注) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

Table 4 社会人に対する認知項目の因子分析結果
(プロマックス回転後のパターン行列)

N=395

	肯定率(%)	第1因子	第2因子	第3因子
		暖かさ	有能さ	社会的地位
寛大	22.8	0.590	0.198	-0.012
暖かい	13.0	0.919	-0.112	-0.073
優しい	15.1	0.907	-0.201	0.030
誠実	37.7	0.568	0.145	0.080
明るい	22.6	0.576	0.018	-0.007
有能	37.8	0.085	0.674	-0.057
自信をもっている	34.3	0.148	0.678	-0.090
自立している	81.0	-0.091	0.543	-0.002
競争心がある	49.9	-0.027	0.564	0.001
知的	36.8	0.152	0.581	0.110
責任が大きい	84.8	-0.250	0.528	0.064
地位が高い	22.6	0.115	0.023	0.719
お金をもっている	49.9	-0.107	-0.016	0.666
高学歴	24.3	0.014	-0.008	0.627

た。この3因子構造は、Fiske, *et al.* (2002) と一致している。各因子の固有値は、順に 4.56, 2.06, 1.38 であった。また、因子相関行列は、第1因子×第2因子が 0.45, 第1因子×第3因子が 0.29, 第2因子×第3因子が 0.50 であった。

さらに、それぞれの因子に負荷量が 0.40 以上の項目の回答を単純加算する形で、「暖かさ」($\alpha = 0.84$), 「有能さ」($\alpha = 0.77$), 「社会的地位」($\alpha = 0.70$) の尺度得点を算出した。これらの尺度間には、低い有意な相関がみられた (Table 2)。

3 尺度の得点について性×学年の 2 要因の分散

分析を行ったところ、Table 5 に示すようになった。社会的地位のみ、性別の有意な主効果がみられ、女性に得点が高かった。

3. 社会人に対する感情

社会人に対する感情を尋ねた 17 項目の回答について、「一致している」「やや一致している」を併せた肯定率を算出した (Table 6)。その結果、最も高かったのは「尊敬」の 5 割であり、それに「あこがれ」「賞賛」「好意」が続いていた。これらの項目を因子分析 (主因子解) した結果、固有

Table 5 性・学年別にみた認知尺度得点

性別 学年	暖かさ			有能さ			社会的地位			
	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N	
男性	1	13.48	4.43	109	21.37	4.39	109	8.49	2.76	109
	2	13.64	4.29	39	20.05	5.46	39	8.38	2.53	39
	3	14.02	3.62	127	21.87	3.67	127	8.59	2.69	126
女性	1	13.35	4.02	52	21.40	3.82	52	9.81	2.28	52
	2	14.24	4.46	21	22.00	2.41	20	10.14	1.59	21
	3	13.73	4.00	49	21.42	3.56	50	9.30	1.97	50
性別主効果	$F(1,391)=0.01$ n.s.			$F(1,391)=1.10$ n.s.			$F(1,391)=17.54^{***}$ 男性<女性			
学年主効果	$F(2,391)=0.59$ n.s.			$F(2,391)=0.47$ n.s.			$F(2,391)=0.41$ n.s.			
交互作用	$F(2,391)=0.24$ n.s.			$F(2,391)=1.71$ n.s.			$F(2,391)=1.02$ n.s.			

注) *** $p < .001$ Table 6 社会人に対する感情項目の因子分析結果（プロマックス回転後のパターン行列） $N=387$

	肯定率(%)	第1因子	第2因子	第3因子	第4因子
		軽蔑	賞賛	同情	羨望
怒り	7.3	0.761	0.015	0.029	0.034
恥	6.5	0.974	0.081	-0.093	-0.106
軽蔑	5.0	0.880	0.046	0.003	-0.109
むかつき	8.8	0.933	0.013	-0.056	-0.034
失望	13.8	0.752	-0.066	0.089	-0.044
憎しみ	3.8	0.742	-0.085	-0.025	0.231
憤慨(いきどおり)	8.5	0.721	-0.011	0.041	0.113
不快	8.5	0.775	-0.039	0.063	0.039
賞賛	30.7	0.049	0.750	0.057	-0.134
尊敬	50.3	-0.093	0.731	0.065	0.010
好意	30.0	0.120	0.828	-0.023	-0.082
あこがれ	44.9	-0.030	0.642	-0.109	0.217
誇らしい	31.7	-0.075	0.734	0.015	0.104
哀れみ	14.4	0.097	0.019	0.852	-0.051
同情	15.9	-0.030	0.008	0.878	0.065
羨望(うらやましい)	24.4	-0.038	0.028	-0.006	0.698
嫉妬	7.3	0.172	0.033	0.046	0.602

値1.0以上の4因子が抽出された。これにプロマックス回転を行った結果、パターン行列はTable 6に示すようになった。各因子に負荷量の高い項目から、第1因子を「軽蔑」、第2因子を「賞賛」、第3因子を「同情」、第4因子を「羨望」と名づけた。この構造は、Fiske, *et al.* (2002)において、能力と親しみやすさの2軸による外集団の分類と合致している。

各因子の固有値は、順に6.71, 3.52, 1.20, 1.01であった。また、因子相関行列は、第1因子×第2因子が-0.03, 第1因子×第3因子が0.54, 第1因子×第4因子が0.41, 第2因子×第3因子が-0.09, 第2因子×第4因子が0.44, 第3因子×第4因子が0.25であった。

さらに、それぞれの因子に負荷量が0.40以上の項目の回答を単純加算する形で、「賞賛」($\alpha =$

Table 7 性・学年別にみた感情尺度得点

		軽 蔑			賞 賛		
性別	学年	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N
男性	1	15.91	7.35	108	15.01	4.39	110
	2	17.77	8.15	39	13.97	5.09	39
	3	14.15	6.80	124	15.51	4.66	126
女性	1	14.40	6.68	50	16.76	3.99	51
	2	11.95	4.74	21	16.00	3.77	21
	3	12.96	5.65	49	15.90	4.39	49
性別主効果	$F(1,385) = 11.75^{***}$ 女性 < 男性			$F(1,390) = 6.67^*$ 男性 < 女性			
学年主効果	$F(2,385) = 2.01$ n.s.			$F(2,390) = 0.80$ n.s.			
交互作用	$F(2,385) = 2.43$ n.s.			$F(2,390) = 1.08$ n.s.			
		同 情			羨 望		
性別	学年	平均値	標準偏差	N	平均値	標準偏差	N
男性	1	4.50	2.38	109	4.30	1.96	110
	2	4.92	2.35	37	3.87	1.64	39
	3	4.40	2.30	126	4.37	2.06	126
女性	1	4.08	2.06	52	4.40	2.10	52
	2	3.86	2.26	21	4.00	1.92	21
	3	3.94	2.10	49	4.49	1.95	49
性別主効果	$F(1,388) = 5.59^*$ 女性 < 男性			$F(1,391) = 0.25$ n.s.			
学年主効果	$F(2,388) = 0.20$ n.s.			$F(2,391) = 1.26$ n.s.			
交互作用	$F(2,388) = 0.42$ n.s.			$F(2,391) = 0.00$ n.s.			

注) * $p < .05$ ** $p < .01$ *** $p < .001$

0.86), 「軽蔑」($\alpha = 0.94$), 「羨望」($\alpha = 0.63$), 「同情」($\alpha = 0.88$) の尺度得点を算出した。これらの尺度間の相関は, Table 2 に示す結果となった。

3 尺度の得点について性×学年の 2 要因の分散分析を行ったところ, Table 7 に示すようになった。賞賛, 軽蔑, 同情について性別の主効果が有意であり, 賞賛は女性の, 軽蔑と同情は男性の得点が高かった。

社会人ステレオタイプ・認知・感情の関連

社会人ステレオタイプを測定する尺度得点と, 認知および感情の各尺度得点について, 相関を求めた (Table 2)。社会人ステレオタイプの「疲労像」は, 社会人に対する有能さや高地位の認知と結びつく一方で, 同情の感情にも関連していた。また「外見像」は高地位認知と正の相関を示す一

方で, 軽蔑や同情といった否定的な感情とも結びつきやすかった。一方, 「キャリア像」は, 有能さ・親しみ・高地位の肯定的な認知と強い相関を示し, 賞賛や羨望の感情と有意な相関を示した。

さらに, 認知と感情の関連をみると, 有能さは, 羨望と賞賛に有意な正の相関を示し, 軽蔑と同情に有意な負の相関を示した。親しみやすさは賞賛と有意な正の相関を示した。高地位は, 賞賛と羨望に有意な正の相関を示した。

さらに, これら 10 の各得点を対象として主成分分析を行った。第 1 主成分と第 2 主成分のサンプルスコアを布置した結果, Figure 1 に示すようになった。全体として, 大きく 2 つのグループに分けられ, ひとつは第 1 主成分に負荷量が高く, 第 2 主成分に負荷量の低い項目群である。このグループには「キャリア像」ステレオタイプが含まれ, 認知として有能・親しみ・高地位, 感情とし

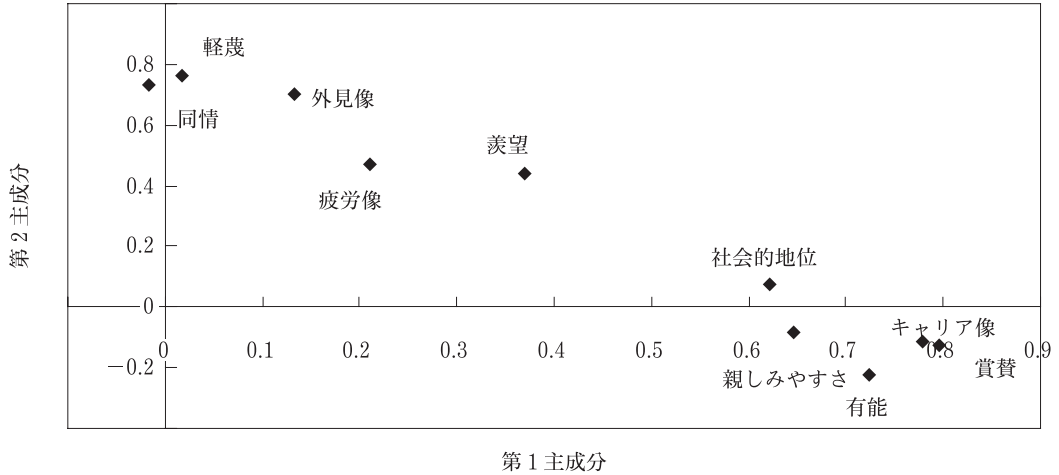


Figure 1 主成分負荷量の布置

て賞賛が含まれていた。一方、第1主成分に負荷量が低く、第2主成分に負荷量の高い項目群には、「外見像」「疲労像」ステレオタイプが含まれていた。さらに、感情として軽蔑・同情・羨望が含まれていた。この点から、大学生の社会人に対する態度は、大きく肯定的側面と否定的側面に分けられることが示唆された。

社会人に対する態度と、就職意識および社会経験の関連

まず社会経験について尋ねた8項目について、「経験した」と回答したものの割合は以下のようになった。「大学の必修科目のインターンシップ」(5.8%)、「大学の選択科目のインターンシップ」(4.5%)、「企業の公募型のインターンシップ」(0%)、「教育実習」(0.8%)、「工場実習」(5.0%)、「販売業、サービス業、接客業などのアルバイト」(57.8%)、「販売業、サービス業、接客業以外のアルバイト」(24.5%)、「ボランティア」(20.5%)。なお、「あてはまるものはない」は22.8%であった。それぞれの該当者の数が少なかったため、経験したとして○がついた数を社会経験得点として算出した。

続いて、社会人ステレオタイプ、認知、感情の各尺度得点と、就職意識に関する2尺度、および社会経験得点の相関を求めた (Table 2)。その

結果、「疲労像」は、就職効力感と低い負の相関を示した。また、「外見像」は、希望する将来の職業の数と低い負の相関を示した。一方、「キャリア像」は、就職効力感と有意な正の相関を示した。認知については、親しみを感じることのみが、就職効力感と有意な正の相関を示した。感情については、賞賛のみが就職効力感と有意な正の相関を示した。また社会経験得点は、就職効力感と、希望する将来の職業の数に対し、有意な相関を示した。

考 察

大学生の抱く社会人ステレオタイプ

本研究では、上瀬 (2007) で得られた社会人ステレオタイプが大学生においてどの程度共有されているのか明らかにすることを第1の目的としていた。

社会人ステレオタイプについて尋ねた項目のうち、肯定率が8割前後と高かったのは「スーツ姿」「ネクタイをしている」など外見に関するものと、「忙しい」「疲れている」など嫌な仕事に疲労しているイメージに関するものであった。「仕事をバリバリこなしている」といった肯定的な項目も4割強支持されていたが、全体として否定的な社会人ステレオタイプが広く共有されていることが確

認められた。

これら社会人ステレオタイプ項目の回答を因子分析した結果、「疲労像」「外見像」「キャリア像」「マイペース像」の4つが抽出された。これらは、描画法で抽出された典型例の背後にあるイメージ構造を示したものと解釈できる。上瀬(2007)では、典型的な社会人像として、「スーツとネクタイで忙しく残業をしている男が疲れて愚痴を言っている」、「汗をかいて頭を下げながら仕事をしている」、「車内で疲れきった様子で集団に埋没している」、「女性を含めて笑顔で挨拶をしている」の4つが提出されていた。これら典型例のうち、第1から第3までは本研究で抽出された「疲労像」「外見像」に対応し、第4は「キャリア像」に対応するものと考えられる。特に、第1因子に負荷量の高い項目は回答の肯定率も高いことから、「疲労像」は社会人ステレオタイプの典型であると位置づけられる。

なお、適当にのんびり仕事をこなしている「マイペース像」は、本調査において、新たに抽出されたものである。この因子は「キャリア像」因子と負の相関を示し、仕事に深くコミットメントしない就労スタイルをもった社会人像と考えられる。これは、仕事中心の生活を送っている従来の社会人ステレオタイプとは合致しないイメージである。「マイペース像」は、該当項目の少なさから因子抽出以上の分析を行っていないが、社会人全体の評価や就職意識にどのような影響を与えるのかについては、引き続き検討が必要である。

社会人に対する態度構造

本研究の第2の目的は、社会人の典型例としてのステレオタイプが、社会人全体に対する認知や感情とどのような関連をもつかを検討することにあった。

まず、社会人全体に対する認知を尋ねた回答では「自立している」が8割、「誠実」「有能」「知的」が4割弱と、肯定的な評価が高くなっていた。また、感情についても「尊敬」「あこがれ」がおよそ半数と多く、社会人ステレオタイプの否定的な側面を指摘した上瀬(2007)の結果と異なって

いる。この理由として、描画法と質問紙法という方法上の差異が考えられる。描画の場合は、マスメディアにおいて風刺的に提示されるような、極端に単純化された典型例が抽出されやすく、この極端例に付随した評価・感情も否定的な内容が生じやすかった可能性がある。これに対して本調査の場合は、社会人全体の認知や感情を尋ねている。このため、極端な例以外も含めて社会人を多面的に判断したため、肯定的な評価が高くなったものと考えられる。

続いて、社会人ステレオタイプ保有と、社会人全体に対する認知・感情の関連についてである。社会人ステレオタイプの強さを得点化し、社会人全体に対する認知や感情の回答と関連分析を行った結果、「疲労像」や「外見像」は、同情や軽蔑といった感情と結びつきやすいことが示された。これらは、能力の低い外集団成員に対して付与されやすい感情である。典型例として「疲労像」「外見像」を想起することが、社会人を外集団と位置づけること、卑下対象として能力を低く評価する過程に結びつきやすいものと推察される。一方、「キャリア像」は、有能さ・暖かさ・社会的地位の認知や、賞賛といった、内集団成員に付与されやすい感情を生じやすかった。「キャリア像」の典型例が思い浮かぶ場合には、社会人は準拠集団として位置づけられやすいと推察される。

これらの各測定尺度得点を変数として主成分分析を行った結果、大学生の社会人に対する態度は、肯定的側面と否定的側面とに大別されていた。上瀬(2007)では大学生が社会人に対し否定的なステレオタイプを共有していると指摘された。本調査の結果は、このステレオタイプは、彼らが社会人に抱く態度の一部であり、一方では有能で暖かい存在として賞賛感情も抱いていることを示すものといえる。

社会人に対する態度と属性

本研究の第3の目的は、大学外の社会経験量、学年、性別によって、社会人に対する態度に違いがみられるかを検討することであった。

まず社会経験量は、自己効力感や希望する職業

の数の増加には結びついていた。このことから、インターンシップやアルバイトなどの社会経験は、自分自身に対する就職への積極的な態度形成を促すことが確認された。その一方で社会経験量は、社会人ステレオタイプ、社会人全体に対する認知や感情、いずれとも有意な相関はみられなかった。ステレオタイプ全体の変容が生じるためには、一定量の接触と時間が必要である。現在多く行われている形のインターンシップやアルバイトを通じた接触では、社会人と大学生との関わり方が表面的であり、個性化した接触が生じにくい可能性がある。また、接触量や時間の少なさから、社会人に対する考え方を考えるような体験は生じにくいとも考えられる。ただし、本調査では各経験の有無の数を合計して、社会経験量の指標としていたため、どの程度深く、職場の人々と関わっているかなどの分析は行っていない。今後は、どのような社会経験が肯定的な社会人イメージを形成するのに有効であるのかなど、より詳細な調査が必要である。

次いで、学年による社会人イメージの差異である。本調査では、学年の上昇により、社会人集団に対する否定的なステレオタイプや評価が低減すると予測していた。分析の結果、「疲労像」は2年生に高く、「外見像」は1, 2年生に高かった。また「キャリア像」は、男性のみ3年生で増加していた。全体としてみると下級生の方が社会人をステレオタイプ化しやすく、仮説が支持される傾向がみられた。ただしこの点については、就職活動前後の変化などを取り上げ、縦断的に変化を検討する必要がある。

一方、性別による回答差をみると、全体として女性は「キャリア像」を持ちやすく、社会的地位の高さと、賞賛の感情を持つなど、相対的に肯定的な態度を示していた。それに対して男子大学生では、社会的地位の高さの認知は相対的には低く、また軽蔑と同情という否定的な感情を抱きやすかった。当初、社会人ステレオタイプは男性社会人の姿として想起されやすいため、性別カテゴリーからも外集団しやすい男子学生においては、否定的なステレオタイプや感情が付与されやすいと考え

ていた。本調査の結果は、この予測とは逆の結果となっている。これは、類似した特性をもつ集団に対して、内集団との差異を強調する心理が、男子学生の方に発生したためと解釈される。

社会人に対する態度と就職意識

本研究の第4の目的は、社会人に対する態度と、就職意識との関連を検討することであった。就職活動の積極性について、就職効力感と、希望する職業の数の2尺度を用いて測定し、社会人に対する態度を測定する各尺度との関連を分析した。その結果、社会人ステレオタイプと就職意識には関連がみられた。「疲労像」は就職効力感と負の相関を示し、「外見像」は希望する将来の職業の数と負の相関を示した。一方、「キャリア像」は、就職効力感と有意な正の相関を示した。これらの結果から、否定的な社会人ステレオタイプは就職活動を抑制し、逆に肯定的なステレオタイプは活発な就職行動に結びつくことが示唆された。また、社会人全体に対する認知と感情については、親しみの認知が就職効力感と有意な正の相関を示し、賞賛の感情が就職効力感と有意な正の相関を示した。このことは、社会人を準拠集団とし位置づけることが、活発な就職活動につながる傾向を示している。

本研究の問題点と今後の課題

全体を通して、大学生は社会人の典型的な姿として、スーツを着て厳しい毎日に疲れている男性をイメージし同情や哀れみを生起させるが、同時に自立して責任感のある存在として尊敬や憧れの感情も抱くことが示された。このことは、上瀬(2007)が指摘したよりも、社会人ステレオタイプが多面的であることを示している。

ただし、質問紙を用いたステレオタイプ測定には、常に回答の抑制の問題が伴っている。今後は、潜在指標の使用を含め、社会人ステレオタイプの測定方法について改めて検討する必要がある。

また本研究では、社会人ステレオタイプが実際に就職活動を抑制することが示されたが、関連性の値はいずれも低かった。加えて社会経験量と社

会人ステレオタイプの間に関連性は示されなかった。変数間の関連が十分に示せなかった原因のひとつとして、就職意識の測定が不十分であった点が指摘できる。就職意識については効力感と希望する職業数の2指標を用いたが、回答者が実際にどの程度の活動をしていたか不明である。また、社会経験についても、経験の有無のみを得点化しており、実際には、どの程度深く、職場の人々と関わっているかによって、社会人に対する態度も異なると考えられる。今後は尺度を精錬させるとともに、両者を媒介する変数を明らかにし、因果関係も含めて検討することが重要である。

さらに、社会人ステレオタイプが発達のどの段階で否定的なイメージが形成されるのかなど、対象を広げて調査することも、社会人ステレオタイプの影響を明らかにする上で必要なことと考えられる。

《注》

- (1) 本調査結果の一部は、日本社会心理学会第45回大会(上瀬・下村・高橋, 2005)で報告されている。
- (2) 本調査の実施にあたっては、下村英雄先生・高橋尚也先生に多大なご協力と示唆をいただきました。ここに深く感謝いたします。

引用文献

- 安達智子(2001). 大学生の進路発達過程——社会・認知的進路理論からの検討——教育心理学研究, 49, 326-366.
- 安達智子(2003). 大学生の職業興味形成プロセス——手段性・表出性, 自己効力感, 結果期待の役割について——, 教育心理学研究, 51, 308-318.
- Allport, G. W. (1954/1979). *The nature of prejudice*.

- New York: Doubleday Anchor Books. (原谷達夫・野村昭訳 1961 偏見の心理 培風館)
- Brewer, M. B. & Miller, N. (1984). Beyond the contact hypothesis: Theoretical perspectives on desegregation. In N. Miller & B. Miller (Eds.), *Groups in Contact: The Psychology of Desegregation* (pp. 281-302). New York: Academic Press.
- Fiske, S., Cuddy, A. J. C., Glick, P., & Xu, J. (2002). A model of (often mixed) stereotype content: Competence and warmth respectively follow from perceived status and competition, *Journal of Personality and Social Psychology*, 82, 878-902.
- 浦上昌則(1993). 進路選択に対する自己効力と進路成熟の関連 教員心理学研究, 41, 358-364.
- 浦上昌則(1995). 学生の進路選択に対する自己効力に関する研究 名古屋大学教育学部紀要(教育心理学編), 42, 115-126.
- 上瀬由美子(2007). 大学生が抱く社会人・サラリーマンステレオタイプに関する予備的研究——描画を用いた検討——, 江戸川大学紀要「情報と社会」, 18, 1-10.
- 上瀬由美子・下村英雄・高橋尚也(2005). 社会人ステレオタイプと就職意識, 日本社会心理学会第45回大会論文集, 650-651.
- Lent, R. W., Brown, S. D., & Hackett, G. (1994). Toward a unifying social cognitive theory of career and academic interest, choice, and performance (Monograph). *Journal of Vocational Behavior*, 45, 79-122.
- 下山晴彦(1986). 大学生の職業未決定の研究 教育心理学研究, 34, 20-30.
- Sherif, M., Harvey, O. J., White, B. J., Hood, W. R., Sherif, C. W. (1961). *The Robbers Cave Experiment: Intergroup Conflict and Cooperation*. Wesleyan University Press: Middletown, Connecticut.
- Tajfel, H. & Turner, J. C. (1979). An integrative theory of intergroup conflict. In W. Austin, & S. Worchel (Eds.), *The Social Psychology of Intergroup Relations* (pp. 33-47). Books/Cole.